

かささぎ 通信 第128号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2023年 9月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年七月の「森三郎の作品を読む会」では、『うぐひすの謡』(1933.8 拓南社) 所収の「桃太郎の夢」「帰らなかった桃太郎」の二作を読みました。

「桃太郎の夢」は『うぐひすの謡(うた)』所収十三作の巻頭を飾る作品で「序にかへて」の副題がついています。そして「帰らなかった桃太郎」は『うぐひすの謡』の最終話です。作品集の最初と最後を「桃太郎」に関わる話にするという構成には、作者・森三郎の意図が何か隠れているのではないかという気がしました。

「桃太郎の夢」には、犬、猿、雉子(きじ)を供につけて、首尾よく鬼退治をした桃太郎が、山道の途中の木の根元でうたた寝をして見た夢が書かれています。桃太郎たちが鬼の岩屋から助け出したのは、日本の昔話の登場人物のかぐや姫、鉢かつぎ姫、浦島、乙姫、葛の葉狐、紅皿、欠け皿、そして外国のお話の主人公の人魚姫、白雪姫、チルチル、ミチル、ピーターパン、さらには童話の主人公「港についた黒んぼ」(小川未明、1921年)、虎ちゃん(千葉省三「虎ちゃんの日記」1925年)、善太に三平(坪田譲治、1933年から)、山猫博士(宮沢賢治「ポラーノの広場」、1934年)、最後には巖谷(小波)のおじさん、(鈴木)三重吉おじさん、北原(白秋)おじさんという総勢二十人でした。その後、巖谷のおじさん、三重吉おじさん、北原おじさんを仲人にして、桃太郎も合わせて都合九組のお話の世界の人物たちの婚礼が行われたという壮大な夢物語です。

1920(大正九)年に松居松葉の持つ桃太郎の像と、饗庭篁村の持つかぐや姫との結婚式を、巖谷小波を媒酌人に行い、趣味家を任ずる人々が興じたという話を、森銃三が「古い雑誌から」(『森銃三著作集』続編第八巻、p.472)で紹介しています。森三郎もその話を下敷きにして、桃太郎の見た夢の内容を作ったのだと思われまます。

この「桃太郎の夢」を何度か読み直すうちに、そもそも桃太郎が鬼退治をしたこと事体が夢の話で、桃太郎たちは鬼が島で鬼退治をする前に

体を休めているうちに眠ってしまったということに気づきました。この話の最後が「こうこは どここの細道ぢや 鬼が島への山道ぢや . . . どこに鬼めが住むぢややら」という歌で閉めてあるのもうなずけます。

最終話の「帰らなかった桃太郎」に登場する鬼が島は、向いの浜辺から見つめる村人たちにとって、敵かで崇高な思いを抱かせる島でした。毎朝お日さまが鬼が島の向うから上る時、ラララララという不思議な歌声が、波音を縫って響いてきました。村人たちはその歌声を鬼の歌と呼び、幸福な思いになりました。ところがある時、犬、猿、雉子をお供に連れた桃太郎がやって来て、鬼が島へ鬼征伐に行くと言いました。するとにわかには人々の心から鬼が島への信仰は消え、桃太郎が首尾よく宝物を持って帰ってきたら、桃太郎たちを打ち殺し、宝物をすべて分捕ってしまうという考えが浮かびます。しかし日がな一日待っても桃太郎一行は帰って来ません。翌朝、いつものように鬼が島が神々しい姿を見せ、人間の迷いを消すあの歌声とその合唱の中から桃太郎の声を聞いた時、人々は自分たちがとんでもないことを考えた、後悔しました。当日集まったメンバーは一樣に、人間の心に欲が浮かんた途端に、それまで神秘と幸福の衣を纏っていた島が、ただのごつごつした岩の島に変化した点を話題にしました。鬼が島はむしろそういう人間たちの住む島の呼び名であったとさえ言えるのではないかと、話し合いました。

北村季晴(すえはる、1872-1931)の「御伽歌劇ドンブラコ(桃太郎)」(1912年)の第三幕に桃太郎の独唱と鬼のコーラスの場面があります。これも森銃三が前掲の「古い雑誌から」(『森銃三著作集』続編第八巻、p.53)で紹介しています。銃三はその音盤を聴いていたといえますから、三郎も一緒に聴いていたのではないかと想像できます。

二作の「桃太郎」の話は、どちらも実際には鬼退治をしていないという点に、森三郎の作品作りの主眼が見えるような気がします。

次回予定 二〇二三年十月十三日(金)午後一時半~三時半

・「角田川」(『雪』)お寺の柿の木』1943.12)

・「雪」(『赤い鳥』1933.4)